

---

# 囚人ゲーム

カカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

囚人ゲーム

### 【Nコード】

N6537Y

### 【作者名】

カカ

### 【あらすじ】

上坂の前に現れる復讐相手。

始まる囚人ゲーム。次々に現れる敵。激化していくゲーム。上坂は勝ち残ることができるのか？復讐はどうなるのか？

## 第一章 主人公を待つもの

人の気配がない山奥に、黒塗りの自動車が行進していた。

その先頭を走る車の後部座席に、その男はいた。

上坂真二。髪は黒色で、まとまっている。切れ長で大きな目。モデルのような体。人目を引くその外見だが、ところどころにアザがある。連れてこられるときに、争った後だった。

手足は縛られており、口はふさがれていた。

舗装されていない山道に車が大きく跳ねる。その振動で、アテルが目覚ます。

「ん、ううん」

目をゆつくりと開けるアテル。その瞳は漆黒と表現できるような、まっすぐな黒色だった。

「ん、」意識がはつきりしてきた。目を完全に開く。

「んーんーんー」

口をふさがれているので、言葉にならない。

運転をしている黒服の男が上坂に気づく。

「気がついたか、上坂真二。静かにしている。もうすぐ目的地に着く。」

状況がまったくつかめない上坂。

どこだここは？確か、そうだ。黒服の男がいきなりやってきて俺を。

23時間前、夜10時。

上坂がいた刑務所の消灯時間。いつもと同じように囚人は牢屋に入られ、鍵が閉められる。

上坂の牢屋の鍵も閉められた。

「はー今日も疲れた。もう寝るか。」

何事もなかったように独り言をつぶやき、ベットに倒れこむ。

30分後。上坂はまだおきている。ベットから顔を上げあたりを確

認する。物音ひとつしない。

全員寝たみたいだな。心の中でつぶやく上坂。

上坂は素早く体を起こし、牢屋の右上隅から左に3つ下に2つのところの石畳に向かう。

慣れた手際で石畳をはずしていく、石畳がはずれるとそこにはそこが見えない空洞があった。

上坂はそれを満足そうに見つめ、音が立たないように石畳を慎重に置く。

空洞からはわずかな風が吹き抜けてくる。外とつながっているようだった。

上坂がやろうとしていること、もうお分かりだろう。

それは・・・脱獄だった。

いざ穴へと飛び込むとする上坂だったが、足が止まる。

カッーン、カッーン。上坂の耳に聞こえてくる、これは足音。

まずい、上坂は反射的に動く。石畳を素早く戻し、ベットにもぐりこむ。

足音は次第に大きくなってくる。上坂の緊張も高まる。

足音から察するに、だいぶ近くにいる。緊張の中上坂には疑問が浮かぶ。

まだ10時35分くらいのはず。巡回は1時間ごとに行うはずなのに？まさかばれたのか。

さらに緊張が高まる。足音の主はついに上坂の牢屋にまで来た。

過ぎろ、過ぎろ、通り過ぎてくれ。上坂が願う中5秒経過・・・足音がピタリとやんだ。

さらに数秒の沈黙。上坂の緊張が最高潮に、心臓は破裂しそうだった。

後ろからジャラジャラ音がする。

何をしているんだ？

振り向こうか、振り向くまいか迷っている時、きいいと音がする。まるでドアを開けるときのような音だ。

ドアを開ける？まさか、と思い上坂が反射的に振り向いた途端、ハンカチのようなものに当てられた。

抵抗するが、意識が薄れていく。

くそ、くそ、やっと脱獄ができるって時に。外に出て復讐をしようってときに。

上坂が最後に頭に浮かんだのは、刑務所に流れていたあのうわさだった。

意識は完全になくなり上坂は眠りについた。

そこで記憶は途切れている。

俺は、あのうわさのとおり、刑務所から連れてこられたのか？

上坂が考えていると、車が止まっていた。どうやら目的地とやらについたようだった。

後部座席のドアが開けられる。開けたのは運転していた黒服の男。

「降りろ。」

黒服の男が短く命令する。

上坂は仕方なく命令に従う。車を降りて上坂が最初に目にしたのはとてつもなく大きな豪邸だった。

よく敷地の広さを東京ドームで例えられるが、これを東京ドームで例えるとなると、

東京ドームを20個並べた広さに、縦に5個並べたような大豪邸だった。

ここでカクレンボしたとしても3日かけても見つけられるか分らない。

呆然と眺めていると、黒服の男が縄を引っ張りながら、豪邸のほうとは別の方角に歩き出す。

ん？縄、見れば縄の先には上坂の首が繋がれていた。当然、上坂は黒服の男に引っ張られる。

いつの間に。上坂が思った瞬間、黒服の男は縄を容赦なく引っ張る。

上坂の首が前に引っ張られる。上坂の体が宙に浮いた。体が引きずられる。

「いててて、痛い、痛い。おいストップ、ストップ。止めるー」  
上坂が絶叫する。

黒服の男は上坂のほうを見ようともしない。縄を引っ張る力を緩めようともしない。

「痛い痛い、いた、もうやめろー」

上坂は、引っ張られる力を利用し前方倒立回転する。上坂はうまく体勢を整える。

引きずられることなく、黒服の男と同じように歩いてついていく。黒服の男に追いつき肩を掴み取る。上坂は腕を引き、黒服の男をこちらに振り向かせる。黒服の男の胸倉を掴み取り、怒りと疑問をぶつける。

「てめー、ふざけんなよ。人を物みてーに引きずりやがって。だいたいここはどこなんだよ。

何で俺をこんなところに連れてきやがったんだ。もう少しで、もう少しで」

上坂はその先を言うことができなかった。上坂の胸の辺りから、高圧電流が流れてきたからだ。

「がっ」

思わず倒れこむ上坂。

「ふう」

黒服の男が短くため息をつき、上坂の頭をつかみ取る。そして、倒れている上坂の頭を上げ、瞳を覗き込む。

「ふざけんなよ、くそが。いつぺんに話すんじゃねーよ。質問なら後で聞いてやるよ。

今は黙ってついてくればいいんだよ。」

そういつて上坂の頭を離して、上坂を見下ろす。

「後お前はここに連れてこられた時点で、人じゃねー。物だ。覚え

とけ」

上坂は顔を上げる。黒服の男と目が合う。黒服の男の目は、人を見ている目ではなかった。

「くっ」

だいぶ楽になってきた上坂は立ち上がる。

それを見た黒服の男は、何も言わないまま何事もなかったかのように歩き出す。

縄で引つ張られているので上坂も歩き出す。

ちっ、なんなんだよ、こいつ。何が物だ。馬鹿にしゃがって。それに俺の体からなんで電流が？

そう思いながらしばらく歩いていると、ヘリコプターがそこにあつた。

黒服の男はヘリコプターの運転席に乗り込み、縄で上坂を後部座席に乗らせる。

ヘリコプターのエンジンがかかる。ゆっくりとあがっていく。黒服の男が話しかけてくる。

「今なら質問に答えてやる。3つまでな。」

上坂は迷うようにためらいながら、疑問を3つぶつける。

「まず、どうして俺がここに連れてこられたんだ。

それに、ここはいったいどこなんだ。

お前は誰なんだ。

黒服の男は無表情で淡々と答える。

「お前にはあるゲームに参加してもらうため。

ここは、私の雇い人の前田様のお屋敷。

私はただ雇われただけの人間だ。

「ゲームって何のことだ、それに前田って」

上坂の言葉が詰まる。黒服の男が銃口を上坂に向けていたからだ。

「質問は3つまでだ」

「ちっ」

上坂は舌打ちする。言えなかったことを心の中でつぶやく。

前だつて言えば、日本で一番の大富豪つて言われるあの前田か？それに何でヘリコプターなんか。

その答えはすぐに解けた。ヘリコプターから外を見ると、それは迷路だった。一度入ったら二度と出られないような複雑な迷路。上から見てもまったく分からない。

それからしばらくするとヘリコプターは豪邸の前で着陸した。

上坂と黒服がヘリコプターを降りる。黒服の男は、

「中に入れ」

とだけ、短く言い豪邸の扉を開けさつさと中へ入っていく。

上坂はおかしなことにきずく。

「あれ、引つ張られない？」

自分の首を見てみるといつの間にか縄が外れていた。

「いつの間に。」

上坂はゆつくりと歩いていき、扉の前に立つ。

上坂は悟っていた。この中に入ったらもう後戻りができないこと。

黒服の男が言っていたゲームが命に

かわること。そして、復讐を果たすためにはこの中に入らなければいけないこと。

上坂は意を決して扉に手をかける。一度大きく息を吸い込み手に力を込める。

上坂は中へと入っていく。

「囚人ゲーム」が始まろうとしている。



## 第二章 囚人ゲーム開始！！

手に力を込める。扉がゆつくりとあいていく。

上坂の目にまばゆい光が差し込む。突然の光に目がくらむ。光に慣れた目をゆつくりと開ける。

上坂は絶句する。

「・・・すげえ。」

ようやく搾り出した言葉がこれだ。上坂の目に映るのは、当然のごとく豪邸の中身。

当たり前にあるシャンデリア、大理石のテーブル、見たこともないような豪華な料理。

いつていったらきりがない。とにかくスケールが違う。

その中にいる無数の人々。豪邸にまったく似合わない風貌をしていた人々。

質素な服を着こなし、料理にも手をつけず、険しい顔をしている。緊張しているのか、ぴりぴりしているようだ。

上坂の横から誰かが近づいてくる。見ればさっきの黒服の男。

「上坂、これを着ろ。」

黒服の男から渡されたのは質素な服だった。

「もうじき、前田様からゲームの説明がある。さっさと用意をしろ。」

「おい、いい加減に教えてくれ。ゲームってのは言いたい何なんだ？」

黒服の男がため息をする。

「ゲームというのは囚人だけで行われるゲーム、いわば囚人ゲームだ。」

「囚人だけが行われるゲーム？」

もう用は済んだという風に、黒服の男がさっさと立ち去っていく。

「お、おい待て。」

黒服の男は、上坂の呼びかけを無視していつてしまう。

「ちっ」

近くにいたウエイトレスにトイレの場所を聞く。トイレで着替えをする。着ていた囚人服はどうしようもないのでその場に脱ぎ捨てておく。上坂はトイレを後にする。

上坂は目の前の階段を下りて行き、料理のある広場に向かう。

その間に何人かの男たちとすれ違う。男たちはこちらをにらんでくる。まるで狂犬だ。

吼えてくる犬の群れの間を裸で通るような感覚だ。

だがこの感覚は上坂に恐怖より確信を与えていた。

この感覚間違いない。こいつら全員囚人！

それは上坂がまだ刑務所にいたところと同じ感覚だった。囚人の間を通るたびに、囚人がにらんできた。

居心地の悪い視線。そんな中を上坂が歩いていると、上坂の肩が一人の男とぶつかった。

「あ、悪い。」

上坂が謝る。

ぶつかった男は何もいわずに去っていった。

「無愛想なやつ。」

囚人とはひときわ違う雰囲気放った男だ。

突然天井の光が消えた。それと同時にスポットライトがつけられる。そのスポットライトを浴びながら、一人の男が階段を下りてくる。

上坂にはその顔には見覚えがあった。新聞やテレビで見たことがある。

恐らくこの男は、

「やあ諸君、よく集まってくれた。私が前田金治だ。」

下りてきた男、いや前田金治が囚人に向かって話しかけてくる。

上坂は背中に寒気を覚えた。

なんだ？前田の声を聴いた瞬間からだの毛が逆立つ。前田とは初対面のはず。体が警告する。

まさか、この男は・・・

「早速だが君たちにはひとつのゲームに参加してもらう。聞いているものもいると思うが、参加してもらうゲームは囚人ゲームだ。」

囚人たちの間に波紋が広がる。囚人たちが声を上げる。

「ふざけるな。」 「俺たちを解放しろ。」 などなど。

「しゃべるな」

前田の静止。

「君たちに質問する権利はおろか、しゃべる権利もない。次口を開いたものは死んでもらう。」

前田が死刑宣告をした瞬間、囚人たちの周りを黒服の男たちが取り囲んだ。

黒服の男たちは全員機関銃を持っていた。

囚人たちの口が固く結ばれる。

「結構。続きを話そう。囚人ゲームとは君たち囚人の命をかけたゲームだ。勝者は一人。勝った者には罪をすべて消し、刑務所から釈放してやる。それだけではない。勝者には1000万円を授けよう。生活の援助金のつもりだ。」

囚人たちに歓喜の声が上がる。

「しかし負けたものには、死んでもらうことになる。」

歓喜の声がやんだ。

「ふざけんな。なん・・・」

どどどどど、銃声が鳴り響く。怒鳴ろうとしていた囚人は後ろの黒服の男に撃たれ絶命した。

前田は何事もなかったように話を始める。

「君たちにはこれから前にあるこの3つの白い箱から一枚ずつ紙を引いてもらう。」

そういつて白い箱を取り出す。

「この箱にはそれぞれ君達が獲得できる、武器・金・アルファベットのが入っている。」 でわ一人ずつ引いてもらう。 「

数10分後

上坂が引いたカードは次の3枚。

武器Ⅱは、金Ⅱさ、アルファベットⅡABであった。

何だこれ？アルファベットはわかるが、武器と金が意味不明だった。「諸君、武器と金はこの場でわかると面白くないので、わからないようにさせてもらった。諸君はこれからそれぞれのスタート地点へ移動してもらう。武器と金はそのにおいておく。アルファベットが示すものは、君達の仲間だ。囚人同士でペアを組んでもらう。相手もスタート地点へ行けばわかる。ゲームのルールについてだが、君達には特殊なケータイを渡しておく。そこにルールはすべてのついている。さらにこのゲームをもっと面白くしてくれる特典を多数つけておいた。それには諸君らが自分できづいてもらうしかない。では以上だ。」

前田は説明を済ませ階段を上り去っていく。

上坂は頭が混乱していた。

ペア？特典？ケータイ？

何がなんだかわからなくなってきた。顔を上げるとほかの囚人が目に入る。

どの囚人も難しい顔をしていた。上坂と同じように頭が混乱しているのだろう。

周りを囲んでいた黒服の男の一人が前に進み出る。

「これから貴様達を各自スタート地点に連れて行く。乗ってきたヘリコプターに乗り込め。」

上坂を含む囚人達は、ヘリコプターに乘せられ前田家の豪邸を離れていく。

上坂のヘリコプターは5時間ほど飛び、どこかの港へ降り立った。明かりのない港は暗闇だ。

そんな暗闇の中にひとつの人影が見える。ヘリコプターは上坂を降ろしどこか飛び去っていく。

港に人影が二つ。二つの影の間に4つの箱が置かれている。

二つの影は箱へと向かって行き近づいていく。

互いの顔が見える距離になるまで近づいた。

相手のほうから声をかけてくる。

「初めまして。僕の名前は伊藤<sup>いとう</sup>海斗。よろしく。」

海のほうから太陽が昇ってきた。日の出だ。

「・・・俺は上坂真二。」

囚人の命を懸けた囚人ゲームの開始が告げられた。

### 第三章 忍び寄る足音

「上坂真二君だね。よろしく。」

伊藤は笑みを浮かべる。

「・・・よろしく。」

少し不満そうに答える上坂。

二人は黙り込む。上坂の目には警戒の色。そうだろう。相手は一日前まで囚人だった男だ。

罪はどうあれ油断ができなかった。そんな上坂に対し、伊藤は笑みを崩さずにニコニコしていた。

上坂にはそれが不服だった。二人の間に流れる微妙な雰囲気、そんな重たい沈黙を破るかのように伊藤が口を開いた。

「真二君、これからどうしようか？」

「俺を君付けで呼ぶな。」

なんなんだ？コイツ能天気すぎる。

「これから宿かホテルを探す。ここがどこだか知っておきたい。それと・・・」

上坂は目の前においてある4つの箱を見つめる。この4つの箱には上坂と伊藤の武器と金が入っている。

上坂はしゃがみこみ、箱を覗き込む。4つのはこのうち2つに上坂と書かれていた。

上坂は自分の名前の書かれた箱の2つのうち、「金」と書かれた箱を開ける。

そこには札束が一つ入っていた。上坂はそれを持ち上げる。量からして枚数は50枚ほどある。

金額は50万円。

伊藤がうらやましそうな声を上げる。

「うわーすごいなあ。上坂君50万円ゲットだね。」

「お前も自分の箱を開けてみるよ。」

上坂がそう催促したので伊藤は自分の箱のうち「金」とかかれた箱を開ける。

伊藤の動きが止まった。その目は信じられないものを見るような目だ。

「いくら入っていたんだ？」

「ひゃ、ひゃ、ひゃく・・・」

伊藤の口が震えている。言葉にならないようだった。

まさか俺よりも何倍もの金額なのか？

「い、伊藤。いくらなんだ。」

伊藤は徐々に落ち着いてきたが、まだ信じられない顔をしていた。

伊藤が金額を言う。

「ひゃく・・・」

まさか百万円か？

「百円」

は——————？??

「ひゃ、百円。嘘だろ？」

上坂も信じられないというような顔をした。

上坂の頭が高速回転する。

俺たちはペアだと前田は言っていた。つまり一身共同体。俺の所持

金は伊藤との合計になる。

俺たちの合計金額は、50万百円？50万百円？ほかのペアの金額は知らないが俺たちは間違いなく最低の

BADスタートだ！。

最低の結論を出したところで上坂の落ち着く。

「いや、大丈夫だ。ほかのペアはもっと低い・・・はず。ポジティブに、ポジティブにいこう。」

上坂は小声でぶつぶつとつぶやく。

そんな上坂を見て伊藤が心配そうに声をかける。

「あの、真二君大丈夫？顔が青いよ。」

「あ、ああ大丈夫だ。」

上坂はふらふらと立ち上がる。

そうだまだ武器がある。武器によっては挽回できる。

「伊藤武器だ、武器をチェックするんだ。」

伊藤は少し戸惑いながらも、もうひとつの箱、「武器」とかかれた箱を開く。

上坂も自分の箱を開ける。武器は白い布に包まれていた。どんな武器なのか判断ができない。

その白い布を取ろうとしたとき、伊藤が大きな声を上げた。

「ああー。見てみて上坂君。ほらこれこれ。」

「俺を君付けするな。」

突っ込みを入れながら伊藤の「武器」を確認をする。

周りが暗く、「武器」も黒かったのではっきりとはわからないが形からしてそれは拳銃だった。

「やったな、伊藤。拳銃はなかなかいい武器のはずだ。」

「うん。」

二人はハイタッチを交わす。パンという音が鳴る。上坂はその音にはつとしたように手を引っ込める。

こんなやつとハイタッチをしてしまった。こんな能天気なやつと。こいつと一緒にいると調子が狂う。なんていうかペースに引き込まれるみたいだ。

「上坂君の武器は何だったの？」

「ああ、俺の武器は・・・」

上坂は改めて自分の箱に向き白い布を取る。

「なっ」

今度は上坂の動きが止まった。伊藤は上坂の箱を覗く。フリーズ。伊藤の動きが止まった。

上坂の武器は暗闇の中でもはっきりとわかる白色。その独特な形は日本人なら誰でも知っているものだった。下部は細く、上部は広がるように膨らんでいる。そう上坂の武器は・・・

「ハ、ハリセン？」



思わず上坂の声が裏返る。

伊藤は何も言わない。

「ハリセン・・・だよな？」

上坂の質問に伊藤が答える。

「う、うん。」

上坂は息を吸い込む、大声で叫ぶ。

「最悪だー。」

金だけじゃねない、・・・武器もBADスタートだった。

上坂は思わず泣きたくなる。

「ま、まあ。大丈夫だよ。銃もあるし、お金もある。ほら、ポジティブに、ポジティブに。」

それさつき俺も思った。俺の頭はこんな能天気なやつと同じことを考えていたのか。

「真二君？」

いつまでも落ち込んでいられない。上坂はそう思って立ち上がる。

「敵がいなくても限らないし、早く寝床を探すか。君付けで呼ぶな。」

上坂は目ざとく突っ込みを入れる。

元気を少し取り戻した上坂を見て伊藤は安心したのか、元気よく答える。

「うん、行こう。」

上坂は伊藤と共に港を出て行く。

上坂がいた港の第一倉庫に2つの人影。その視線は上坂たちのほうに向けられていた。

そのうちの一人が口を開く。

「最初のターゲットはあいつらにしようぜ、弟よ。」  
もう一人が答える。

「ああ、そうしょーぜ。兄ちゃん。」

上坂たちに死神の釜が振り下ろされようとしていた。

## プロローグ ある噂（前書き）

事情がありプロローグが4話目になっています。  
物語の始まりなので、最初に読んでください。

## ブローグ ある噂

ある刑務所に一つのうわさが流れていた。

掃除をしている囚人たちが手を止めて、うわさについて話を始める。

「おい、聞いたか？また一人いなくなっただって。」

「ああ、聞いた聞いた。あれだろ？1ヶ月ごとに重罪を犯したやつが消えるっていう。」

「そうそう。」

「で、今度は誰がいなくなっただんだ？」

「ほら、おいつ。上坂だよ。」

「あいつか。・・・虚言だろ。」

「ああ。」

囚人たちはそこで話をやめて再び掃除に取り掛かる。

これは囚人たちで行われる命がけのゲーム、囚人ゲームの序章だった。

#### 第四章 凶悪すぎる兄弟

上坂と伊藤が港を出て20分後。

「それにしても思ったより早く寢床が見つかってよかったね。」

「ああ。そうだな。」

「これからどうしようか？」

「お前そればかりだな。少しは自分で考えろよな。」

「えー。そんなこといわれても。」

伊藤は不満そうに言う。

「僕考えるのは苦手なんだ。それに比べて上坂君ってすごく頭よさそうだし。」

上坂はため息をつく。

「何でお前はそう能天気なんだ？後、俺を君付けで呼ぶな。」

上坂は忌々しそうに言う。

伊藤は上坂の言葉が聞こえなかったかのように上坂の言葉を見無視し、ポケットからケータイを取り出した。

「そのケータイは、」

「そう、このケータイね僕を運んだ黒服の男の人が置いていった。」

それは前田の持っていたケータイと同じものだった。

「貸せ、」

上坂は乱暴にそれを取り上げた。

「あー。それまだ僕も中を見ていなかったのに。」

伊藤の言葉を見無視して上坂はケータイを操作する。しばらくのあいだぴぽばとおとがしていたが、やがてその音がやんだ。

「なにに、何かわかったの？」

「これは見た目や機能は普通のケータイだ。お気に入りを開いてみると囚人下ーぬについてにサイトがあったんだ。ルールが書かれている。」

「えっ、僕にもルールを見せて。」  
ケータイを覗き込もうとする伊藤に上坂は体を挟み込ませて阻止する。

「まで、これにはGPS機能がついている。まず現在の俺達のいる場所を知るのが先だ。」

伊藤は何かを言おうとしたがやがて納得したように黙り込む。

上坂は再びケータイを操作する。

「出たぞ。ここは・・・石川県七尾市。」

「石川県七尾市。」

伊藤は上坂の言葉を復唱する。

「あまり聞いたことがない場所だね。」

「ああ、石川県なんてあまり聞かない県だしな。」

伊藤はその話題には興味がないのか話を先に進めようとする。

「上坂君、ここがどこかはもうわかったから囚人ゲームについての情報を早く。」

「ああ、そうだな・・・君つけんなよ。」

上坂はケータイを操作し再び囚人ゲームについてのサイトを開く。

上坂は注意深く読み上げていく。

「ルール1、ペア同士が200m以上はなれた場合両者をその時点でゲーム失格とする。」

ルール2、1週間のうちに最低でも1ペア倒さなければゲーム失格とする。

ルール3、戦闘中にペアが死んだ場合残されたもう一人はそのまま戦闘を続ける。相手のうち一人が倒されたときそこで強制的に戦闘終了となる。戦いを続けようとした場合両者を失格とする。両者はお互いの合意があれば新たにペアとなることができる。そこでペアを作らなかつたとき、両者はその後一人で戦う。

ルール4、ペアを殺すことは禁ずる。

ルール5、金は共同で使うことは許可するが、武器は所有者しか使うことはできない。別のものが使おうとした場合そのものは失格

とする。しかし、所有者が死亡した場合武器は死んでから一番初めに触ったものが新たな所有者となる。」

上坂はルールを一通り読み上げた。

何なんだこのルールは？ルール4、なぜこれだけ「禁ずる」なんだ？他は失格となっていないのに。

前田は言っていた。ゲームの負けは死を意味すると。失格となったものは恐らく死を意味するんだろう。

だけど、「禁ずる」はどうなるんだ？ペアを殺したら失格になるのか？それとも何か別のことが・上坂はチラッと伊藤のほうを見る。「わー、すごいルールだねー。」みたいな顔をすると思っていた上坂の予想に反し、伊藤は冷たい目をしていた。

まるで何かを観察するような目。普段の能天気な伊藤からは考えることはできない、真剣な目つきだった。伊藤が上坂の視線に気づく。「わー、すごいルールだねー。」

上坂の数秒前の反応をした。伊藤の変化はあまりにも大きく不自然で別人を錯覚させた。

「そうだな。」

短い返事。さっきの伊藤は一体？

ホテルの照明が突然消えた。一瞬にして視界が暗闇になる。

「なんだ？」

「あれ照明が？」

伊藤の間の抜けた言葉の直後、きゃー！。

女性の悲鳴が聞こえた。悲鳴は男女ともに、数秒のインターバルもなく次々と聞こえてくる。

上坂は窓へと駆け寄る。窓を開け身を乗り出す。首を上下に動かし状況を確認する。

伊藤が部屋の扉を開けようとしているのが見えた。上坂は窓から身を引く。

「やめろ、扉を開けるな。」

「え？なんで？」

「さっき他の階を確認したんだが、明かりがついていた。照明が消えたのは俺達の部屋・・・いや恐らくはこの階全体だろう。」

「何で僕達の階だけ？」

伊藤の能天気ぶりに苛立ちを覚える。ここまでイってんだから気づけよ。

「敵だ。そう考えるのが自然だろう。さっき聞こえた悲鳴はこの階のほかの客のものだろう。」

「あ、そうか。」

なるほど、つといた顔をする伊藤。ほんとにこいつは。

「気をつけろよ、伊藤。こいつらはかなり凶悪なやつらだ。人を容赦なく見境なくも殺すような、な。」

「か、上坂君。僕達はこれからどうすればいいの？」

伊藤は泣きそうな声で言う。そんなこと俺に言われても困る。

「やつらはいずれこの部屋にやってくる。それがわかってるんだからやつらを返り討ちにすればいい。伊藤泣くな。静かにするんだ。俺達がこの部屋にいることをやつらに悟られてはいけない。俺はお前の銃を使うことはできない。俺の武器はハリセン。役にはたない。いいか、このゲームはお前にかかっているんだ。」

「う、うん。」

上坂の言葉で伊藤は覚悟を決めたようだった。

上坂と伊藤はベットの陰に隠れ、扉が見える位置に待機する。

せめて来た囚人達を返り討ちにするためだ。

客の断末魔はいまだに続いている。

客の悲鳴を聞いた人が部屋から廊下に出て、囚人の餌食に遭う。その繰り返り返りだった。

悲鳴の聲がだんだんと大きくなっていった。

やつらが近づいてきている証拠だ。上坂の緊張が高まる。

かなきり声の音源が隣の部屋まで来た。

いよいよ来るか。上坂と伊藤がそれぞれの武器を持ち上げ身構える。5分後、10分後



扉が開く様子はない。

上坂が恐る恐る口を開く。

「去った・・・のか」

「・・・そうみたいだね。」

二人は安堵のため息をつく。

上坂は扉から向きを変え窓の方へと向く。

上坂達の部屋の窓は月明かりが差し込む角度となっている。

今は夜で満月だ。まぶしいくらいの月明かりが差し込んでいる。

上坂は妙なことに気づいた。

月明かりに妙な形をした黒い模様が差し込んでいた。

上坂はその黒い模様の正体に気づき恐る恐る窓の外のほうへと目を行く。

上坂は絶句した。伊藤が上坂の異変に気づく。伊藤も窓のほうへと目をむく。

月明かりに差し込む黒い模様、それは二つの人影だった。

囚人たちは上坂が開けた窓の取っ手にぶら下がっている。

二人のうち少し背の高いほうが話しかけてきた。

「こんばんわー。一応確認するけどあんたら囚人だよなー？まーどつちにしても死んでもらうけどね。」

上坂は絶体絶命だった。



## 第五章 隠された特典？

二人の囚人は窓から部屋へと侵入する。月明かりに照らされて二人の囚人の右腕上腕部に刺青があるのを上坂は見逃さなかった。

刺青に描かれているのは蛇と鎌。鎌の先端に蛇の首がかかっている。あれは死の象徴の刺青。普段は捕食する側の蛇に鎌をかけて殺す残酷性の象徴だ。

上坂はその刺青をしている囚人に見覚えがあった。

「お前たちは、もしかして倶利伽羅兄弟・・・なのか。」

囚人たちはぞつとするような笑みを浮かべさも嬉しそうに答える。

「俺たちのことを知っているのかー？。嬉しいねー。俺たちのことを知っているってことは俺たちの罪も知っているんだよね？」

上坂はたじろぎながらも答える。

「ああ・・・お前たちのことはニュースで見たからな。罪もない人を50人も殺した凶悪連続殺人兄弟倶利伽羅。」

上坂の言葉を聴き、倶利伽羅・兄の口元の端がさらに2cm上がった。

「いいね、いいねー。なあ、お前らさー知ってるか？人つてのはただ殺してもつまんねーんだぜ。」

殺す直前までターゲットに恐怖を与えるんだ。そうしてターゲットの顔が恐怖にゆがんでいるときに、一思いにはやらずに、じつくりなぶるようにやるんだ。恐怖と交わってターゲットの悲鳴が鈴の音のように聞こえるんだぜー。」

ぞくつ。上坂の背筋に悪寒が走る。

こいつら正気じゃねー。もう人手すらない。・・・こいつらは化けモンだ。

倶利伽羅・弟が待ちきれないといったような顔で声を上げる。

「兄ちゃん早く殺ろうよー。こいつらの首から血が噴出すところを見たいよー。」

上坂は心の中で猛烈に突っ込む。

「うーい、お前かわいらしい声で何とんでもないこと望んでんだよ！  
倶利伽羅・兄がなだめるように言う。」

「ああ、ああ。そうだな、弟よ。早くこいつらの首を刎ねよー。」  
倶利伽羅兄弟はそれぞれの武器を取り出した。

倶利伽羅兄は等身大の鎌だった。倶利伽羅弟はブーメランだ。その  
ブーメランは殺傷能力を上げるために刃がついている。しかもあの  
形は飛ばした後に一直線に飛んで行きそのまま真っすぐに戻ってく  
るタイプのブーメランだった。

上坂は瞬時に考える。

「どうする？ここから逃げようにも扉はふさがっているし。窓にもや  
つらがある。どうすれば逃げられる？」

倶利伽羅・兄が上坂の考えを見抜いたかのように言う。

「おいおい、まさかどうやってたら逃げられるなんて考えてんじゃじ  
ゃーねーよな？あきらめな！」

俺らに目をつけられた時点でお前らはもうすでに終わりなんだよ！。  
覚悟を決めるこつたな！」

俺らに殺される覚悟をよー。」

そういうと同時に倶利伽羅兄弟は上坂たちめがけてダッシュ。

倶利伽羅・兄は上坂の首を刎るため。倶利伽羅・弟は伊藤の首を薙  
ぐ為。己の欲望を満たすためにただ走る。

上坂がとつさに叫ぶ。

「伊藤ー。今だ、撃て。」

伊藤はすばやく反応した。懐に隠し持っていた銃を取り出し倶利伽  
羅兄弟に向けて発砲。

ぱんぱん、ぱん。倶利伽羅兄弟に向かって銃弾が飛んでいく。

倶利伽羅兄弟はすんでのところで銃弾を回避。倶利伽羅兄弟はそれ  
ぞれ別々の方向に跳び身を隠す。

こいつらただの囚人じゃねー。慣れてやがる。

倶利伽羅・兄が身を隠しながら得意そうにいう。

「ひやははは。なめんなよ。俺たちは武装した警察から2週間逃げ延びていたんだぜー。不意打ちくらいじゃー殺られねーよ。」

「ひひひひ。」

弟の君の悪い薄ら笑いが響く。

「くそつ。今のうちだ、伊藤逃げるぞ。」

上坂は伊藤の手を取り扉の元へ駆け寄ろうとする。だが一向に進もうとはしなかった。

「おい、どうしたんだよ伊藤。」

上坂が苛立ちをぶつける。

「駄目だよ。上坂君。今外に出ればさらに犠牲者が出る。ここできりをつけないと。」

伊藤の声には恐怖が感じられなかった。その声には強い決心が感じられた。

上坂はあきらめた。普段能天気な伊藤が他人のことを心配しここまで言っている。上坂が逃げるわけにはいかなかった。

「よし、やるか。」

「うん。」

「・・・君つけんなよ。」

倶利伽羅・兄が君の悪い声で話しかけてくる。

「ひやは、もう言い残すことはないのか。そろそろ行くぜー。」

上坂は自分の武器ハリセンを取り出す。

今は時間を稼がないと。

「おい、お前らいいのか？もうすぐ警察が来るぞ。あんだけ大騒ぎしたんだ。ほかの人も気づいているはずだからな。」

倶利伽羅・兄は小ばかにしたような口調で、

「お前ケータイを見てねーのかー？」

「どういうことだ。」

「俺たちが起こしたことはすべて前田がもみ消してくれるんだぜー。イヤー金もちはずげーよなー。」

そうだったのか。道理でこんな大規模にゲームを行うはずだ。

「それよりいいのか？お前ら首が飛ぶぜ？」

「？？？どういうことだ？」

そのとき伊藤が叫んだ。

「上坂君危ない。」

伊藤が上坂を跳ね飛ばす。

さつきそこまで上坂の首があつた場所にブーメランの刃が通つた。

「あー惜しいなー。」

倶利伽羅・弟が残念そうにいう。 倶利伽羅。 弟が上坂のすぐ後ろにまで回りこんでいた。

「くそ。」

伊藤が倶利伽羅・弟に向けて発砲する。

倶利伽羅・弟はすばやく身を隠す。

上坂は心の中で納得する。

道理でさつきから倶利伽羅・弟の声がしなつたはずだ。 倶利伽羅・兄もやけに話を延ばすような言い方だった。

だが疑問がひとつ残つた。

「なぜ俺を狙つたんだ？拳銃を持っている伊藤を倒したほうがその後もやりやすいのに。」

珍しく倶利伽羅・弟が答えた。

「俺たちは弱いやつから狙う主義なのさ。武器がハリセンなんてそりゃー雑魚だろーが。」

「？？どうして俺の武器がわかつたんだ？」

ひやははは。 倶利伽羅・兄の笑い声が鳴り響く。

「本当にケータイを見てねーんだなー。ケータイにはリーダー機能がついてんだよ。半径500以内にゲーム参加者の囚人がいると、反応して点滅するようになってんだよー。さらあに、半径100m以内になると相手の名前と所持している武器がわかるようになってんだなーこれが。」

なつ。 そうだったのか。 だから俺たちの武器や居場所がわかつたのか。

倶利伽羅・兄が身を乗り出し、上坂の首を駆るために鎌を横に一線に振る。

上坂はそれをすんでのところかわす。

伊藤が倶利伽羅・兄に向かって発砲。それをすばやくかわされる。

倶利伽羅兄弟は障害物をうまく使い伊藤の銃弾をかわしながら上坂たちを追い詰めていった。

こいつら本当に囚人か？そこの軍人くらいに強いんじゃないか。

「くそ。」

上坂は伊藤と背中を張り合わせた状態になる。

倶利伽羅兄弟はベットやソファなどの障害物の間を移動し伊藤に狙いをつけさせない。

伊藤は銃は素人なのだろう。その上に動き回れたら銃弾が当たるわけがなかった。

コロコロ、上坂の足に何かが当たった。ワインだ。ワインが敷き詰められた戸棚がわれそこから転がってきたのだろう。

上坂はそのワインを数秒見詰めた後、ハッと何かに気づいたように顔を上げる。

「伊藤俺にいい考えがある。耳を貸せ。」

上坂は伊藤になにやら耳打ちをする。

「いいな、俺の言うとおりにやるんだぞ。」

「うん。」

上坂は倶利伽羅・兄にむかって走った。伊藤は銃を発砲し倶利伽羅・弟に向かって発砲しけん制をする。

倶利伽羅・兄が上坂に向かって鎌を振り上げる。

上坂はその鎌をかわし鎌を足で止め、手を倶利伽羅・兄の手に添える形で鎌をつかみ鎌の動きを完全に封じる。

「ちつ。離せよ二枚目！。さつさと俺らに殺されちまえよ！。」

「冗談言っんじゃないよ。蛇やる！。」

数秒間にらみ合う二人。

そのとき、どっか壁に何かがぶつかる音がした。上坂は音のしたほ

うを見る。

伊藤が倒れていた。気を失っているようだった。

倶利伽羅・弟は伊藤の一瞬の隙を突き胸元を思い切り蹴り上げたようだった。

「伊藤。」

上坂が叫ぶ。

倶利伽羅・弟が気味の悪い笑みを浮かべ上坂の体をじっくり見る。蛇がその細い舌を使いじっくり獲物をなめるような目だった。

倶利伽羅・弟が歓喜の声を上げる。

「ひやはは。今だ弟よ殺れ。殺すんだ。」

倶利伽羅・弟がゆっくりと上坂に近づいてくる。

上坂はかまを固定していて動けない。

倶利伽羅・弟が手を伸ばせば届く距離までに近づく。上坂にトドメをさすためブーメランを振り上げる。

「ひやはは。」

「ひひひひひ。」

倶利伽羅兄弟が一斉に笑い出す。倶利伽羅・弟が別れの言葉を告げる。だがその別れの言葉は、悲しみの感情は一切なく、聞いたものに恐怖を覚えさせるような低くぞつとするような声だった。

「じゃあーな。」

上坂めがけてブーメランを振り下ろした。

刹那。上坂は瞬時に行動。

鎌を固定していた足はずし倶利伽羅・兄との力の均衡を崩す。倶利伽羅・兄がバランスをくずした。

上坂はその隙をつき、体を横に倒しその場から飛びのきブーメランを回避する。

倶利伽羅・弟は標的が上坂から自分の兄に代わりブーメランをとつさに止めた。

上坂は倒れこみながら転がっていたワインと立方体の物を手に取る。上坂は叫ぶ。



「伊藤、今だ、起きろ。」

伊藤が上坂の言葉に反応し起き上がる。

そう、伊藤は気絶したフリをしていたただだったのだ。倶利伽羅・弟に蹴られたのもすべて演技だった。

上坂は伊藤に立方体のものを投げ渡す。伊藤はそれを受け取り、中から細長いものを取り出しそれを箱にこすり付けて発火させる。伊藤が持っているものはマッチだった。

上坂は手に取ったワインを倶利伽羅兄弟にぶつける。

倶利伽羅兄弟はかわす暇もなくお酒まみれになる。

倶利伽羅兄弟は上坂たちが何をしようとしているのかに気づき恐怖の色をにじませた。

「やめろ、やめろ、やめろー。」

絶叫がこだまする。

伊藤は聞こえなかったかのようにマッチを何のためらいもなく放り投げた。

マッチの火がアルコールに発火。倶利伽羅兄弟の体が火炎に包まれる。

「ぎゃーー」

倶利伽羅兄弟が再び絶叫。立ち上がろうとするにも足元が熱さでおぼつかない。

倶利伽羅兄弟は近くにあった窓に寄りかかる。熱さに耐え切れず、体制崩しを窓の外から転落した。

ドン。人が落ちた音。鈍い、バットでたたいたような音だった。

伊藤が不安そうな声を出す。

「あの人たち大丈夫かな。」

上坂が安心させるように言う。

「大丈夫だ。この階はそんなに高くない。人がおちてもしにはしないだろう。だが骨折ぐらいはする。これであいつらは戦闘不能だ。」

「で、でもまだ火が。」

「それも大丈夫。窓の外を見てみるよ。」

伊藤は窓の外を見てみる。なにやら騒がしい。野次馬が集まっていた。

「火はあいつらが何とかしてくれるだろう。」

「・・・上坂君無責任だね。」

「うるせー。後、君つけんな。それに、」

上坂は意地の悪そーな顔をし、

「火はお前がつけたんだろーが。」

「そんなー、ひどいよ上坂君がやれって言ったんじゃないか。」

上坂は部屋の扉を開け廊下に出て行く。

「どこ行くの？」

上坂は振り向きながら答える。

「ここから出るんだ。いずれ大騒ぎになる。その前にここを出るんだ。・・・君つけんな。」

上坂はそう言いさつさと出て行く。

伊藤があわてたように言う。

「待ってよー。」

ホテルを出てから30分後。

上坂と伊藤は山奥にいた。

「しょーがない。今日はここで野宿にするか。」

「そうだね。・・・あ、そういえばさ・・・」

伊藤が思い出したように言う。

「なんだよ。」

「あの時さ、僕が上坂君って言っても注意しなかったよね。」  
「・・・」

上坂のしばしの黙考。

「あっ、」

思い出した、伊藤が俺を跳ね飛ばしたとき・・・

「上坂君危ない。」つか言ってった気がする。

「ね、ね、い wanna ったよね？」

「・・・」

上坂はしばらく黙り込み、その後

「君、っけんなよ。」

「おそつ。」

伊藤が珍しく突っ込んだとき、

ピピピピ、ピピピピ

電子音が鳴り響いた。音源は上坂のポケットからだ。

上坂はぽつけとを探る。

ピピピピ、ピピピピ

音はひときわ大きくなる。音はケータイから鳴っていた。

上坂と伊藤は瞬時に警戒。

上坂はケータイを開く。そこには何もしていないのに文字が記されていた。

「戦闘終了、勝者上坂、伊藤ペア。ボーナスとして100万円を進呈する」

上坂が内容を読み上げる。

上坂と伊藤は黙り込む。

次の瞬間、珍しいことに両者の声がハモッタ。

「何これ？」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6537y/>

---

囚人ゲーム

2011年11月27日18時55分発行